

# 奄美大島南部・瀬戸内町における 重音節発生の歴史的経緯

——狭母音化との相対年代から考える——

松 森 晶 子

キーワード：琉球語、歴史言語学、重音節、アクセント、狭母音化

## 要 旨

諸鈍方言における「k'u:p(首), ?usa:k(兎)」の語末の閉音節、「kutu:ba(言葉), wara:bi(子供)」の語中の長音節、「ɸuk'ru(袋), ?apra(油)」の語中の閉音節に代表されるように、奄美大島南部の瀬戸内町の諸方言には、重音節が頻出する。本稿では、これら重音節構造の発生の原因についての通時的考察を行い、その考察を通して、この地域に生じたいくつかの音変化の相対年代についての提案を行う。まず本稿では、これら重音節の生起は、この地域に過去に生じたアクセントの変化と切り離して説明することはできないことを論じる。また、どのような条件のもとでこれらの重音節構造が生じたのかの理解には、半狭母音の狭母音化(\*o > u, \*e > i)との相対年代をも考慮に入れる必要があることも論じる。本稿では、瀬戸内町を中心とする奄美大島南部の諸方言では、これら重音節の発生を動機づけた変化よりも、狭母音化のほうが後に起こったと想定されることを論じる。

## 1. 問題提起その1—瀬戸内町の語末狭母音脱落の例外はなぜ生じるのか

奄美大島南部に位置する瀬戸内町<sup>せとうち</sup>の諸方言は、その音節構造に際立った特徴がある。瀬戸内町<sup>かけろま</sup>の加計呂麻島の西北部にある芝方言<sup>しば</sup>注<sup>1</sup>を例にとりて示せば、この体系には「wara:p(蕨), nana:t(七つ), ?usa:k(兎)」など、CVC<sup>注<sup>2</sup></sup>のような子音で終わる音節構造を持つ語が頻出する。さらに、その一部の語には「sika:ma(早朝), hatē:hē(畑)」の下線部のように、語中に CV: のような長母音を持つ音節が現れる。その一方で、この方言では、「ɸuk'ru(袋), k'itne(狐)」の下線部のように、語中にも CVC 構造が出現することがある。本稿では、子音で終わる音節を「閉音節」、長母音で終わる音節を「長音節」、さらに閉音節と長音節とを合わせて「重音節」と呼びながら、議論を進めていくこととする。

これまでに筆者が調査してきた瀬戸内町の諸方言には、上述のような重音節が頻繁に観察されている。そのような特徴を持つ体系の代表として従来から注目を集めてきたのが、加計呂麻島の諸鈍方言<sup>しよどん</sup>である。この方言は、古くから Martin (1970) によって着目・

記述されていたが、特に1990年代に、かりまた・富高・長嶺・金(1992)(以下かりまたほか(1992)と記す)や狩俣(1995)、かりまた(1996)が、多くの語彙の音形とともに、アクセントについての詳細な報告も行い、その記述研究に大きく貢献<sup>注3</sup>した。

このように、近年特に注目されつつある奄美大島南部の重音節であるが、その発生については、未だに解決されていない謎も残されている。その詳細については後述するが、たとえば特定の重音節がどのような条件で生じるのかについても不明な点があり、さらにその重音節発生には例外が少なからず存在し、それらの例外がなぜ生じるかという点に関しても、納得のいく解釈が得られているとは言えない。

これら未解決の課題とは何かについて検討するため、本節では、筆者がこれまで収集した瀬戸内町各地のデータの中から、諸鈍方言<sup>注4</sup>に的を絞って、その具体例を見ていく。前述の芝方言と同じく諸鈍方言には、次のように、閉音節で終わる語彙が存在する。

### (1) 語末の閉音節が生じる例(加計呂麻島の諸鈍方言を例にして)<sup>注5</sup>

k'u:p 首, mī:t 水<sup>注6</sup>, k'i:t 傷, k'u:k 釘, k'u:te 口, mu:ε 虫, tu:r 鳥, ?ak'u:p 欠伸, ?adim 杵

(1)に示された語群の語末の閉音節は、本来存在した語末の短い狭母音(\*i, \*i, \*u)が脱落することによって生じたものである。したがって当然のことながら、語末が狭母音で終わらない次のような語群には、この閉音節構造は生じていない。

### (2) 語末の閉音節が生じない語(諸鈍方言を例にして)

hana: 鼻, hana: 花, nuno: 布, t'ino: 角<sup>つ</sup>, t'eikja:ra 力, kutu:ba 言葉, kuho:ro 心, minja:to 港

したがって瀬戸内町の諸方言には、奄美大島祖語から現代に至るまでのある段階で、次のような狭母音の脱落変化が生じ、語末の閉音節が生じたことが推定できる。

### (3) 語末の狭母音脱落 語末の短い狭母音(\*i, \*i, \*u)を削除せよ。

ちなみに(1)に例示された語末の閉音節構造の出現が、奄美大島全体の中でどのような分布を示しているかを知るには、柴田(編)(1984)の言語地図が役立つ。その「腰 ku:ε (p.283)、ひざ t'ibu:ε (p.284)、煙 kibu:ε (p.287)、水 mī:t (p.292)」などの分布を検討すると、上述の閉音節は(芝・諸鈍のある)加計呂麻島だけでなく、奄美南部の瀬戸内町に広く観察されていることが分かる。図1はそのうちの「水」の言語地図である(ただし図中の囲み線で示した地名は、筆者の加筆による)。瀬戸内町は、奄美大島内の市町村のうち、最も南部に位置している。図1から、奄美大島全域にわたって dzi で終わる語形が広範囲に分布する中、(mī:t のように)その語末に閉音節を持つ語形(図1では記号

＞で示されている。)が、請島、与路島を含む瀬戸内町のほぼ全域にわたって分布していることが見て取れる。これまで諸鈍を中心に記述・報告されてきた重音節は、実は諸鈍だけでなく、瀬戸内町のほぼ全域に観察されている、この地域の顕著な特徴のひとつと言えるだろう。

さて、(3)に示した語末狭母音の脱落には、実は例外が少なくない。たとえば次の(4)の語はすべて狭母音で終わっているにもかかわらず、(3)の変化の影響を受けて閉音節を生じさせていない(つまり、×*ɲik*(息)、×*ɲiɾ*(汁)のように変化していない)。

#### (4) 語末の閉音節が生じない語例 (諸鈍方言を例にして)

ʔik'i: 息, tik'i: 月, hagi: 足, eiei: 猪, ʔueu: 潮, eiru: 汁, ʔami: 網, nami: 波, ʔumi: 海

本稿では、(4)に示したような例外がなぜ生じたのか、という疑問を出発点に、以下、通時的考察を行っていく。以上の(1)と(4)に挙げられたような語末の狭母音の脱落とその例外は、この諸鈍方言だけでなく、少なくとも筆者が観察してきた瀬戸内町の諸方言(古仁屋、節子、加計呂麻島の芝、諸鈍、須子茂、於斎、秋徳、渡連)に共通して観察される。本稿ではこれらの諸方言のうち、主としてこれまで筆者が最も多くデータを集めることのできた諸鈍方言と古仁屋方言の例を挙げながら、論じていくこととする。

## 2. 問題提起その2—瀬戸内町の語中の重音節はなぜ生じるのか

さて、かりまたほか(1992)が諸鈍方言について指摘しているように、瀬戸内町の諸方言には、語中にも重音節構造が出現する。以下は諸鈍方言の例だが、各語の第2音節目の母音が長くなり、CV:のような長音節が語中に出現していることが分かる。

#### (5) 語中に長音節を持つ語例 (諸鈍方言を例にして)

kutu:ba 言葉, tamu:tu 袂, habi:ra 蛾, ʔito:ko 従妹, hatē:hē 畑, wara:bi 子供

すでに前節(4)では、「ʔik'i: 息」のように、語末に長音節が出現する場合があることを見てきたが、瀬戸内町の長音節は語末だけでなく、語中にも出現するのである。

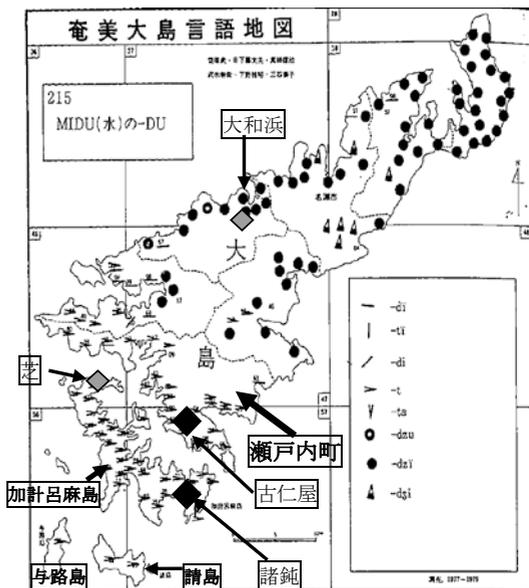


図1: 柴田(編)(1984: 292)による「水」の言語地図

さらに瀬戸内町諸方言では、閉音節構造（CVC 構造）が語末以外にも出現することがある。次の(6)の語例<sup>註7</sup>も、諸鈍方言において筆者が調査したデータから得られたものだが、ɸuk'ru(袋)、ʔapra(油)などの下線部のように、語中にも閉音節が観察されている。

### (6) 語中に閉音節を持つ語例（諸鈍方言を例にして）

ɸuk'ru 袋, k'itne 狐, hikru 垢, ʔapra 油, gutɕja 鯨, kapto 兜, mat'gi 松

この(6)の語例の下線部の閉音節は、語の第2音節が狭母音（/u/, /i/, /i/）を持つ場合に、その狭母音を脱落させて（例：ɸuk'uru > ɸuk'ru(袋), mat'igi > mat'gi(松)）生じたものである。当該の第2音節目の母音が消失した結果、CV.CV.CV > CVC.CV のように音節構造の組み換えが生じ、語全体が「重軽」の音節構造を持つことになったと思われる。

さて、狩俣（1995）、かりまた（1996）は、(5)の長音節や(6)の閉音節の発生について次のような説明を行った。諸鈍方言には、「重い音節と軽い音節が交互に現れる」という「リズム構造上の特性」があり、そのため「輕輕 CV.CV」や「輕輕輕 CV.CV.CV」のような軽い音節の連続だけからなる語は存在しない。そのような特性のために、(5)や(6)に挙げられたような語中の重音節が発生した、とする説明である。

たしかに(5)の長音節構造も、(6)の閉音節構造も、それらが発生した結果、当該の語全体に CV.CV:CV（軽重軽）や CVC.CV（重軽）のような、重い音節と軽い音節が交互に出現するような韻律構造が生じる結果となっている。しかしながら今、(5)の例のうちの kutu:ba(言葉)、habi:ra(蛾)など、第2音節目に狭母音の /u/ と /i/ を持つ例に焦点を当て、これらを(6)の語と比較してみると、以下のような疑問が生じる。いったいなぜ「言葉」や「蛾」は、\*kutuba > kutu:ba(言葉)や \*habira > habi:ra(蛾)のように第2音節目の母音を長めることによって重音節を発生させているのに、(6)の語は \*ɸuk'uru > ɸuk'ru(袋)や \*mat'igi > mat'gi(松)のように、その音節の母音を脱落させることで、重音節を発生させているのだろうか。（換言すれば、\*kutuba(言葉)も、\*ɸukuru(袋)も、2音節目に同じ母音を持っているにもかかわらず、前者はなぜ×kutba(言葉)とはならず、後者はなぜ×ɸuku:ru(袋)とはならないのだろうか。)[「リズム構造上の特性」の存在を認識するだけでは、この問題に対しての明快な解答は得られない。

以上、諸鈍方言の語例を中心に見てきたが、このような重音節構造の発生は、奄美大島南部の瀬戸内町の諸方言に、広く確認できるものである。次節ではまず、瀬戸内町諸方言の重音節とその例外の観察を通じて、この地域の重音節の発生は、その祖体系に過去に起こったアクセントの変化と密接な関連がある、という通時的仮説を提示する。

### 3. 瀬戸内町の重音節構造の発生とアクセント変化との相関関係

上述の瀬戸内町の重音節の発生とその例外の原因を探る手がかりは、まず各語をアクセント型別に整理して検討してみることによって得られる。本節では、これまで筆者が

特にそのアクセントに焦点を当ててデータ収集してきた、瀬戸内町の古仁屋方言<sup>註8</sup>の例を検討しながら、その音節構造の特徴とアクセント型との相関性について見ていく。

さて、古仁屋方言をはじめとした瀬戸内町の諸方言は二型アクセント体系を持つ。(以下、]はピッチの下がり目を、[は上がり目を示す。また、↑と↓は曲線音調を示す。続く音節が下降調である場合は↑を、それが上昇調である場合は↓を使用する。) そのうちの第1の型は、ha'na:(鼻)、ha[na] nu(鼻が<sup>ダ</sup>)、t'ei[kja]ra(力)、t'ei[kja]ra nu(力が<sup>ダ</sup>)のように、原則的に文節の頭から数えて2つ目の拍が高くなり、その文節末のピッチは下降して終わるものである。もうひとつの型は、t'i[na(綱)、t'i'na [nu(綱が<sup>ダ</sup>)、ku'tu: [ba(言葉)、ku[tu]ba [nu(言葉が<sup>ダ</sup>)のように、3拍以上の長い文節には2つの高音調の山が出現し、その文節末のピッチは上昇して終わるものである<sup>註9</sup>。その2種類の型を本稿では以下、それぞれ「下降型」、「上昇型」と呼ぶ(ちなみに、下降型には系列別語彙<sup>註10</sup>のA系列、上昇型にはB・C系列の語彙が所属している)。以下は、古仁屋方言の2種のアクセント型の具体例である。

### (7) 古仁屋方言の2種類のアクセント型

- a. 下降型    ]ji:            柄    ji:] nu ...            柄が<sup>ダ</sup>〜    (↑tei: 血, ↑ko: 川)  
               ha'na:            鼻    ha[na] nu ...            鼻が<sup>ダ</sup>〜    (t'i'ni mi- 瓜, ?u'tu- 音)  
               t'ei[kja]ra        力    t'ei[kja]ra nu ...        力が<sup>ダ</sup>〜    (ha[ga]ma 釜, ki'bu'e 煙)
- b. 上昇型    ↓ti:            手    [ ti: nu ...            手が<sup>ダ</sup>〜    (↓mi: 目, ↓ja: 家)  
               t'i [na            綱    t'i'na [nu...            綱が<sup>ダ</sup>〜    (?[ita 板, ha[na 花)  
               ku'tu: [ba        言葉    ku[tu]ba [nu...        言葉が<sup>ダ</sup>〜    (ki'bu[ra 森, ?i'teu p 苺)

さて、(1)で諸鈍方言について検討した狭母音の脱落は、古仁屋方言でも生じている<sup>註11</sup>。以下では説明の便宜のため、まず(その祖形が3拍以上から成ると想定される)比較的長い語から検討してみることとする。この条件下では、下降型の語にも、上昇型の語にも、語末の狭母音の脱落(3)は等しく生じていることが、次の例から確認できる。

### (8) 古仁屋方言の語末の閉音節(その1)

- a. 下降型    ?a'k'u p 欠伸, ki'bu'e 煙, t'i'bu'e 膝, ei'ru'e 印, ha'na'te 鼻血,  
               ka'ta'te 形, ↓ko'te 黴/麴, ↑'a't 二つ, ↑mi't 三つ, ↓ju't 四つ, t'i'd im 太鼓,  
               tu'na'r 隣, ji'ci'r(女から見た)男の兄弟, wu'na'r(男から見た)女の兄弟,  
               ↑'a'r 二人, mi'tea'r 3人, ju'dar 涎<sup>註12</sup>
- b. 上昇型    ?i'teu p 苺, ?u'la'mat 火, mi'ni't 蚯蚓, ?i'it'it 五つ, si'it'it 蘇鉄, na'nat  
               七つ, ?u'sa'k 兎, ?u'na'k 鰻, sa'ba'k 櫛, di'si'k 薄<sup>すすき</sup>, t'i'lmu'k 紬<sup>つむぎ</sup>, ga'ra's 鳥,  
               ha'nu's さつま芋, ka'la'ma'te 頭, ci'kjar 光, ci'ldar 左, ei'bar 尿, ku'su'r 薬,  
               su'no'r モズク, ka'gam 鏡, ?a'dim 杵, ni'dim 鼠, nu[ho'lgir 鋸, ku[ho'not 九つ  
               これらの語の語末にもともと狭母音が存在していたことは、比較言語学方法によって

確認することができる。たとえば同じ奄美大島の中北部に位置する大和浜方言では、(3)のような語末の狭母音脱落は生じない。そのため大和浜方言では、(8)に挙げられた語群の語末には、/i/や/i:/などの狭母音が出現する。以下、本稿の大和浜方言のデータは長田・須山(編)(1977)、長田・須山・藤井(編)(1980)からの引用である。引用の際には、長田ほか(編)(1977, 1980)の音韻表記の記号を、あえて変えずに使用した。なお大和浜方言は一型アクセント体系なので、(9)にはアクセントの区別は示されていない。(参考のため、古仁屋の下降型と上昇型の区別に相当する語群の境界を、2重斜線//で示した。)

(9) 奄美大島・大和浜方言からの例(長田ほか(編)1977, 1980に基づく)

ʔakubi 欠伸, xĩbusi 煙, cĩbusi 膝, sirusi 印, hanazi 鼻血, xaθaci 形, xoozi 麴, taaci 二つ, miici 三つ, ʔjuuci 四つ, — 太鼓, θonari 隣, ʔjeheri 男の兄弟, ʔonari 女の兄弟, taari 二人, miɕjari 3人, ʔjodari 涎 // ʔiɕjubi 苺(ホウロクイチゴ), maɕi 火, mĩmĩzi 蚯蚓, ʔiɕiɕi 五つ, suθiɕi 蘇鉄, nanaci 七つ, ʔosagi 兎, ʔonagi 鰻, sabaki 櫛, zihiki 薄, cĩmugi 紬, garasi 烏, hanusi / haNsĩ さつま芋, xamaci 頭, hikjari 光, hizjari 左, sibari 尿, kusuri 薬, sĩnori モズク, xagaN 鏡, ʔaziN 杵, niziN 鼠<sup>註13</sup>, nohogiri 鋸, xuhunuci 九つ

以上の事実から、(8)の古仁屋方言の語例の音節構造は、語末の狭母音の脱落(3)の結果、現在のような語末の閉音節を持つことになったことが推定できる。

これに対し本来の(「祖形において」という意味)2拍の名詞は、語末に閉音節が発生するか否かが、そのアクセント型によって決まってくる<sup>註14</sup>。語末狭母音の脱落(3)は下降型の語にのみ生じ、上昇型のものには生じないのである<sup>註15</sup>。以下の例は、語末に閉音節を持つ本来の2拍名詞(これらは系列別語彙のA系列に属す)だが、これらはすべて下降型のアクセントを持っている。

(10) 古仁屋方言の語末の閉音節(その2)<sup>註16</sup>

ʔka:p 紙, ʔk'u:p 首, ʔi:p 海老, ʔha:p 蛇, ʔmi:t 水, ʔk'i:t 傷, ʔna:t 夏, ʔk'u:k 釘,  
ʔka:k 垣根, ʔsĩ:k 鋤, ʔk'u:tc 口, ʔtu:tc 妻, ʔku:ɕ 腰, ʔʔu:ɕ 牛, ʔdu:ɕ 友達,  
ʔmu:ɕ 虫, ʔfa:ɕ 橋, ʔfi:r 大蒜, ʔci:r 昼, ʔtu:r 鳥, ʔmu:r 丘, ʔju:r 飾, ʔsĩ:m 隅

一方、本来の2拍名詞で上昇型のアクセントを持つ語には、(たとえば mu[gi(麦)や ju[ru(夜)のように)語末の狭母音の脱落は生じない。次の語例(これらは系列別語彙のB・C系列に属す)が、それを示している。

(11) 古仁屋方言の語末狭母音の脱落が生じない例(その1)

t'i[ki 月, mu[gi 麦, wu[gi 砂糖糖, ʔu[ɕu 潮, ʔi[ri 錐, na[ri 実, ju[ru 夜, ei[ru 汁, mi[mi 耳, s'i[mi 炭, ʔa[mi 網(以上B系列)/ ta[bi 足袋, ʔu[bi 帯, ni[bu 柄杓, ʔi[k'i 息, ha[gi 足, ma[gu 籠, ʔu[si 臼, ma[ɕu 塩, ha[ɕi 箸, ti[ru 籠, nu[mi 蚤, ʔu[mi 海(以上C系列)

このように、2拍名詞の語末狭母音の脱落には、アクセント型の違いが密接に関わっている。そのため、たとえば下降型の「隅」(A系列)と上昇型の「炭、墨」(B系列)は、古仁屋方言では異なる音節構造で出現する。「隅」のほうは  $\text{tsim}$  のように閉音節で終わる構造を持つのに対し、「炭、墨」のほうは  $\text{si[mi]}$  となり、その語末の狭母音は脱落しない<sup>注17</sup>。下降型の「昼」(A系列)と上昇型の「夜」(B系列)についても、同様なことが言える。「昼」は語末狭母音の脱落(3)の影響を受けて  $\text{tçir}$  となるが、「夜」のほうにはその変化の影響は及ばず、 $\text{ju[ru]}$  という音形で出現するのである<sup>注18</sup>。

では、同じ条件を備えていても、なぜ、下降型の語末狭母音は脱落するのに、上昇型のそれは、脱落しないのだろうか(より具体的に言えば、なぜ上昇型の「炭」「夜」は  $\text{xlsim}$  や  $\text{xlju:r}$  のようにはならないのだろうか)。

本稿では、語末狭母音の脱落(3)に(11)のような例外が生じた理由は、その変化が起こった時代における当該の語の語末音節の長さにある、とする仮説を提示したい。つまり本来の2拍語の上昇型は、(3)の変化が及んだ際に、その語末音節に上昇調の曲線音調が実現しており、そのためにその音節の母音が長音化していた<sup>注19</sup>と考えるのである。

では、そもそもなぜ、語末音節に曲線音調が実現することになったのだろうか。この解答のためには、同じ体系内の下降型の音調型との連動を考慮に入れて考える必要がある。本稿では、祖体系では、現代の下降型はかつて  $\text{*ha[na]}$ (鼻)、 $\text{*si[mi]}$ (隅)、 $\text{*ha[gama]}$ (釜)のように第1拍目に下がり目を持ち、上昇型は  $\text{*ha[na]}$ (花)、 $\text{*si[mi]}$ (炭)、 $\text{*ju[naha]}$ (夜中)のように2拍目以降にピッチの上昇を持っていた<sup>注20</sup>と想定する。そしてその後、次のような変化がその祖体系に生じて、2つのアクセント型の両者において、その高い音調の山が1拍分、右へ移動した、と考える。(以下、簡略化のために、高い音調をH、低い音調をL、下降音調をHL、上昇音調をLH、と示すことがある。)

## (12) H音調の右移動      H音調の山を1拍分、右方向へ移行させよ。

そしてこのH音調の山の移動が、上昇型2拍語の語末音節を長くすることになった、と推定する。下降型が  $\text{*ha[na]} > \text{ha[na]}$ (鼻)のように、本来第1拍目にあったH音調の山を2拍目に移動させたことと連動し、上昇型のほうも  $\text{*ha[na]} > \text{hana[]}$ (花)のように、そのH音調の山を右方向へ移動させた。その結果、当該の語末拍にLHの曲線音調が生じ、その曲線音調を実現するために語末の母音が長くなった、と考えるのである。つまり、次のような変化が祖体系に生じたことを、本稿では提案する。

## (13) 上昇型2拍名詞の語末音節の母音の長音化

上昇の曲線音調(LH)を実現させるために、2拍名詞の語末拍の母音を長くせよ。

しかしながら、同じ上昇調の本来の3拍語には、(13)の長音化は生じなかった。なぜ

なら3拍語では、たとえば \*ka[ɡami(鏡) > kaga[mi] のように、(12)の変化によってピッチの上昇位置が2拍目から3拍目に1拍分ずれたとしても、その語末に存在する H 音調実現のために、あえてその語末音節の母音を長める必要はないからである。

さて、(13)の変化が生じた後、上昇型は \*hana[:(花) > ha]na[:、\*kaga[mi(鏡) > ka]ga[mi] のように、あらたにその語頭に H 音調を生じさせ、その結果、重起伏音調 (HLH) を持つことになったと考えられる。この変化は、(14)に簡略に記述しておく。

#### (14) 上昇型の重起伏化 \*LLH > HLH

以上を理解するために、ひとまず、非狭母音で終わっている語 (つまり語末狭母音の脱落(3)の影響が及ばなかった、と想定される語) を、下降型から2つ (ha<sup>ˈ</sup>na 鼻、ha[ɡa]ma 釜)、上昇型から2つ (ha[na 花、ju<sup>ˈ</sup>na:[ha 夜中)、例にとりて検討してみよう。これらは次のような過程を経て、それぞれ、現代の音形と音調型とに変化を遂げたことが推定される。(このうちの \*ju]na[ha > ju<sup>ˈ</sup>na:[ha という変化については、次節において詳しく扱う。)

#### (15) 変化の相対年代と古仁屋方言の語末の閉音節の発生

	祖形が2拍と推定される語		祖形が3拍と推定される語	
	下降型	上昇型	下降型	上昇型
祖形	*ha]na(鼻)	*ha[na(花)	*ha]gama(釜)	*ju]naha(夜中)
H音調の右移動(12)	ha[na]	hana[	ha[ɡa]ma	juna[ha
語末音節母音の長音化(13)	-----	hana[:	-----	-----
上昇型の重起伏化(14)	-----	ha]na[:	-----	ju]na[ha
現代の形	ha <sup>ˈ</sup> na	ha]na <sup>註21</sup>	ha[ɡa]ma	ju <sup>ˈ</sup> na:[ha

さて、以上の議論を念頭に、ここで(11)に挙げられた語末狭母音の脱落の例外について検討してみよう。すでに(8)で見たとおり、本来3拍以上だったと考えられる語の語末狭母音は、そのアクセント型の違いにかかわらず脱落を遂げている (たとえば下降型の r<sup>ˈ</sup>id im(太鼓)と上昇型の ka<sup>ˈ</sup>gam(鏡)は、両者ともその語末の狭母音を脱落させている)。これに対し(10)、(11)で比較・検討したように、本来の2拍語は、そのアクセント型によって、語末に閉音節が出現するかどうかが決まる。これは、語末狭母音の脱落(3)が生じた段階で、当該の語の語末音節が長母音を持っていたか否かの違いによる、というのが、本稿の提案である。

本稿では、「sīmi 炭、juru 夜」など、上昇型のアクセントを持つ本来の2拍語は、(3)の変化が生じた時代にはすでに(13)の変化の影響を受けて、\*si[mi > simi[: のように、その語末に長母音を持っており、そのために(3)の変化の影響を免れた、と推定する。したがって(13)は(3)の変化よりも前に生じた、と考える必要があり、ここから(13) >

(3)という相対年代が想定される。

以上の点を理解するために、その祖形が2拍語だったと想定される  $\uparrow s\bar{i}m$  (隅) と  $s\bar{i}mi$ : (炭)、3拍語だったと想定される  $t'\bar{i}\uparrow d\bar{i}m$  (太鼓) と  $ka\downarrow gam$  (鏡) を使って、現代の古仁屋方言の各語形に至るまでの変化のプロセスを、以下に示そう。

#### (16) 変化の相対年代と古仁屋方言の語末の閉音節の発生

	祖形が2拍と推定される語		祖形が3拍と推定される語	
	下降型	上昇型	下降型	上昇型
祖形	*[s̄i]mi (隅)	*s̄i[mi] (炭)	*t'̄i[d̄i]mi (太鼓)	*ka[gami] (鏡)
H音調の右移動(12)	s̄i[mi]	s̄imi [	t'̄i[d̄i]mi	kaga[mi]
語末音節母音の長音化(13)	-----	s̄imi [:	-----	-----
語末狭母音の脱落(3)	s̄i]m <sup>注22</sup>	-----	t'̄i[d̄i]m	kaga[m]
上昇型の重起伏化(14)	-----	s̄i]mi[:	-----	ka]ga[m]
現代の形	↑s̄im	s̄i]mi	t'̄i↑d̄im	ka↓gam

#### 4. 瀬戸内町の重音節構造の発生と狭母音化の相対年代

本節では、第2節において諸鈍方言の(5)と(6)の語例を使って提起した、重音節の生起にかかわる問題に対しての解答を探っていこう。ここでは、これら重音節発生の原因を理解するには、語末音節の脱落(3)だけでなく、この地域に過去に起こった半狭母音の狭母音化との相対年代も、考慮に入れなければならないことを論じる。

さて、(3)の変化には、通時的に見て重要な例外がある。次の(17)に示した古仁屋方言の語彙は、その語末に狭母音を持っているにもかかわらず、語末狭母音 (\*i, \*ī, \*u) の脱落(3)を経っていない (つまり ×ʔut(音)、×t'̄im(爪)のようにはなっていない)。

#### (17) 古仁屋方言の語末狭母音の脱落が生じない例 (その2)

ʔutu 音, wutu 夫, suku 底, misu 味噌, busu 臍, çiguru 垢, ʔukuru 袋, ʔutu:tu 弟, t'̄imi 爪, ʔami 雨, kagī 影, nabī 鍋, ʔasi 汗, kamī 甕, so:ki 籠, eu:ki ご馳走, ko:bi 頭  
これら(17)の語の語末狭母音は、北琉球全体を通じて広く観察される半狭母音の狭母音化によって生じたものである。この変化を本稿では、次のように簡略に表す。

#### (18) 半狭母音の狭母音化 (無条件変化)

\*o > u

\*e > i

さて(17)の例が示すように、半狭母音の狭母音化(18)によって後から生じた狭母音には、語末狭母音の脱落(3)は生じていない<sup>注23</sup>。ということは、(17)の語群の語末母音は、

(3)という変化が瀬戸内町諸方言の祖体系に生じた時代には、まだ狭母音へと変化を遂げておらず、たとえば \*ɔto(音)、\*miso(味噌)、\*ɸukuro(袋)、\*ʔame(雨)、\*so:ke(籠)、\*ko:be(頭)などのように、依然としてその語末に半狭母音を持っていた<sup>注24</sup>、と考えなければならない。このことから、(3) > (18)のような相対年代が割り出せる。

ここで、ここまで提案してきた主な変化の相対年代をまとめると、次のようになる。

### (19) 瀬戸内町に生じた一連の変化の相対年代

H 音調の右移動 (12) > 上昇型 2 拍語の語末母音の長音化 (13) >  
 語末の短い狭母音の脱落 (3) とそれに伴う語末の閉音節の発生 >  
 上昇型の重起伏化 (14) > 半狭母音の狭母音化 (18)

以上を念頭に入れながら、いよいよ、第2節で問題提起した語中の重音節の生起について、その解答を探っていこう。すでに見たように、「言葉、蛾」などの語は *ku*tu:ba、*ha*bī:ra のように CV.CV: CV のような音節構造を持つ。これに対し「袋、油」などは、*ɸ*uk'ru、*ʔ*apra のように CVC. CV のような音節構造を持つ。これらの2つのパターンのうちのどちらになるかを決定づけている要因とは、一体何なのだろうか。

ところで後者（つまり *ɸ*uk'ru(袋)、*ʔ*apra(油)など）に関しては、筆者がこれまでそのアクセントを調査してきた古仁屋方言の話者は、その語中の狭母音を脱落させず、*ɸ*uk'uro ~ *ɸ*uguro(袋)、*ʔ*abura(油)、*gu*dzi:ra(鯨)のような語形で発音する傾向を示していた。そこで本節では、古仁屋方言の代わりに、この語中の狭母音の脱落が特に顕著に認められた諸鈍方言のデータを使いながら、議論を続けていくことにする。

まず、諸鈍方言において CV. CV: CV のような音節構造で出現する語を、そのアクセント型も併記しながら、以下に示す。

### (20) 語中の長音節構造（諸鈍方言を例にして）

*ku*'tu: [ba 言葉, ta' mu: [tu 袂, ha' bī: [ra 蛾, ku' ho: [ro 心, ʔi' to: [ko 従兄弟,  
 ha' tē: [hē 畑, wa' ra: [bī 子供, ju' na: [ha 夜中, dzi' ma: [mī 落花生

(20)の例はすべて上昇型であり、さらにその語中に重起伏音調(HLH)を持ち、2つのH音調の山を各語の内部に実現させている。この重起伏音調は、前述の(14)の変化によって生じたものであるが、以下、その2つのH音調の山のうちの前の山をH1、後ろの山をH2と呼ぶこととしよう。本節ではまず、瀬戸内町の祖体系には次のようなアクセント変化が生じ、これにより、文節初頭の音節に実現していたH1が、\**ku*tu[ba > *ku*'tu: [ba(言葉)のように、1拍分後ろにずれて、語の2音節目に実現することになった、と想定する。すなわち次のような変化である。

## (21) 上昇型の1つ目のH音調(H1)のシフト

語頭のH1を、その語の2つ目の音節に移行させよ。

そして本稿は、そのH1のシフトが(ku<sup>h</sup>tu:<sup>h</sup>[ba(言葉)のように)その語の2音節目にHLの曲線音調を生じさせたことを契機にして、その音節の母音が長くなった、と提案する。

しかしながら、(20)の語と同じアクセント型(上昇型)で、同じように語中に2つのH音調の山を持ちながら、次の語群には(21)の変化は及んでいない。

## (22) 語中の閉音節構造(諸鈍方言を例にして)

↑<sup>h</sup>ɸuk<sup>h</sup>[ru 袋, ↑<sup>h</sup>k'it[ne 狐, ↑<sup>h</sup>hik[ru 垢, ↑<sup>h</sup>ʔap[ra 油, ↑<sup>h</sup>kap[to 兜,

↑<sup>h</sup>gute[ɾja 鯨, ↑<sup>h</sup>mat<sup>h</sup>[gī 松, ↑<sup>h</sup>mue[ɾjo 蓆, ↑<sup>h</sup>ʔue[ɾjo 後ろ

これらの語例に出現するH1は、(21)のような変化が生じた時点で、なぜ、×<sup>h</sup>ɸu<sup>h</sup>k<sup>h</sup>u:<sup>h</sup>[ru(袋)、×<sup>h</sup>ma<sup>h</sup>t<sup>h</sup>i:<sup>h</sup>[gī(松)のように、2つ目の音節に以降しなかったのだろうか？

本稿では、(20)と(22)の語類の違いには、各語の祖形における第2音節目の母音の質の違いが関与している、と提案したい。ここで再度(20)にもどって、「言葉、袂、蛾」以外の例を検討してみると、それらの2音節目は(ʔi<sup>h</sup>to:<sup>h</sup>[ko(従妹), ha<sup>h</sup>tē:<sup>h</sup>[hē(畑), wa<sup>h</sup>ra:<sup>h</sup>[bi(子供)など例が示すように)すべて非狭母音(\*o, \*ə, \*a)を持っていることが見て取れる。このことは、(21)の影響を受けてH音調を担うことになった第2音節目の母音は、(その変化が起こった時点では)すべて非狭母音だったことを示唆する。したがって(21)の変化は、次のように修正されなければならない。

## (21)' 上昇型の1つ目のH音調(H1)の山のシフト

語の第2音節の母音が非狭母音ならば、語頭のH1をその第2音節目に実現させよ。

なお、このH1の山のシフト(21)'は、(8b)の「ʔu<sup>h</sup>sa:k 兎, ka<sup>h</sup>ma<sup>h</sup>te 頭, su<sup>h</sup>no:r モズク」などには生じていないことから、(3) > (21)'のような相対年代が推定できる。

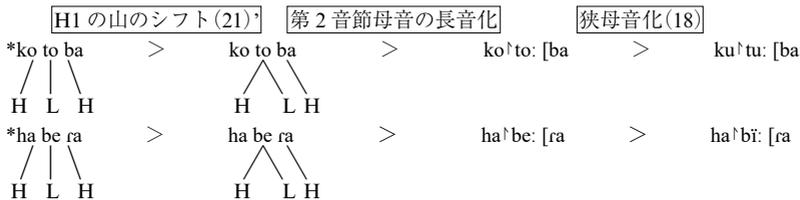
以上の点を考慮に入れて本稿では、ku<sup>h</sup>tu:<sup>h</sup>[ba(言葉)や ha<sup>h</sup>bī:<sup>h</sup>[ra(蛾)の第2音節目も、(現代ではそこに狭母音を持ってはいるものの)過去においては、半狭母音(\*o, \*e)を持っていた時代があったと推定する。つまりこれらの語は、\*kotoba(言葉)や \*habera(蛾)の下線部が示すように、もともと第2音節目に非狭母音を持っていた。そして(21)'の変化が起こった時代には、まだ(18)に記述した狭母音化は生じていなかった。そのためこれらの語は、(21)'の変化の影響を受けることとなり、その結果、その第2音節目にHLの曲線音調が実現して当該の音節の母音が長くなった、と推定するのである。

このためには、半狭母音の狭母音化(18)は(21)'の変化よりも遅く起こった変化である、と考える必要がある。つまり、(21)' > (18)のような相対年代が推定される。

ここで、諸鈍方言の ku<sup>h</sup>tu:<sup>h</sup>[ba(言葉)と ha<sup>h</sup>bī:<sup>h</sup>[ra(蛾)が、どのような過程を経て現在の

語形へと変化を遂げたかを図示してみよう。(以下、前節で提示した(12)や(14)などの変化が生じたことを前提にして、それらが生じた後の祖形から出発する。)

(23) **ku<sup>h</sup>tu: [ba(言葉)と ha<sup>h</sup>bī: [ra(蛾)の語中の長音節発生の通時的過程**



これに対して(22)に挙げられた語は、\* $\phi$ u]ku[ro(袋)や \*ma]t'i[gi(松)の下線部が示すように、もともと(祖語の段階から)その第2音節目の母音が狭母音だった。そのために、上昇型の H1 の山のシフト (21)', およびそれに伴って生じる第2音節の長母音化が生じた際、その影響をこうむることがなかった、と推定される。なぜなら当該の変化(21)'は、第2音節目が非狭母音であった場合にのみに生じた変化だからである。

その後、\* $\phi$ u]ku[ro(袋)や \*ma]t'i[gi(松)の語中の狭母音は、次のような変化によって弱化・脱落し、 $\uparrow\phi$ uk[ru や  $\uparrow$ mat'[gi のような音形へと変化を遂げたと考えられる。

(24) 語中の狭母音の弱化・脱落

語中の、H 音調に挟まれた L 音調と結びついた短い狭母音 (\*i, \*i, \*u) を脱落させよ。

以上に推定してきたような変化の相対年代によって、(22)の  $\phi$ ukru(袋)、mat'gi(松)などの重音節がどのように生じてきたかを示したものが、(25)である。(20)に挙げられた語と比較・検討するという目的のために、kutu:ba(言葉)を選んで並べて載せた。

(25) 変化の相対年代と諸鈍方言の重音節の発生

祖形	* $\phi$ u]k'u[ro(袋)	*ma]t'i[gi(松)	*ko]to[ba(言葉)
H1 の山のシフト (21)'	-----	-----	ko <sup>h</sup> to: [ba
半狭母音の狭母音化(18)	$\phi$ u]k'u[ru	-----	ku <sup>h</sup> tu: [ba
語中の狭母音の弱化・脱落(24)	$\phi$ u]k'[ru	ma]t'[gi	-----
現代の形	$\uparrow\phi$ uk'[ru	$\uparrow$ mat'[gi	ku <sup>h</sup> tu: [ba

5. まとめと課題

以上、奄美大島の瀬戸内町の諸方言を記述対象としてその音節構造を概観し、通時的な観点から、この地域の重音節発生に関する考察を行った。本稿では、?usa]k(兎)、

kutu:ba(言葉)、ɸuk'ru(袋)などの語末・語中の重音節発生の原因を解明するには、その地域に過去に生じたアクセントの変化を、まず考慮に入れる必要があることを論じた。そしてこの地域には、アクセントと密接に関連するいくつかの変化が次のような順序で生じることによって、異なるタイプの重音節構造が生じてきた、と提案した。

## (26) 奄美南部・瀬戸内町に生じた変化の相対年代

H 音調の右移動(12) > 上昇型 2 拍語の語末音節の長音化(13) > 語末の短い狭母音の脱落(3) > 上昇型の重起伏化(14) > 上昇型の H1 の山のシフト(21)' > 半狭母音の狭母音化(18) > 語中の短い狭母音の弱化・脱落(24)

前述のように、狩俣(1995)、かりまた(1996)は、諸鈍方言には「重い音節と軽い音節が交互に現れる」という「リズム構造上の特性」がある、と指摘した。この指摘は瀬戸内町の韻律上の顕著な特徴を的確に捉えており、記述的には妥当である。しかしながら本稿では、そのような「リズム構造上の特性」が存在するから特定の母音が長音化したり、閉音節構造が出現したりしたのではなく、主としてアクセントの変化(およびそれに伴う音節構造の変化)が原因となって、この地域に各種の重音節が発生し、その結果、上述のようなリズム構造上の特性が生じることになった、と捉える。したがって狩俣(1995)、かりまた(1996)の提案した「リズム構造上の特性」は、重音節化の「原因」ではなく、むしろ「結果」である、というのが、本稿の提示した仮説である。

ところで、本稿で論じた ʔusa:k(兎)、kutu:ba(言葉)、ɸuk'ru(袋)などの語末・語中の重音節は、他の奄美諸島の体系には観察されていない。したがって、本稿で提示してきた(3)、(21)'、(24)などの変化は、瀬戸内町を中心にした奄美大島南部諸方言が奄美大島祖語から分派した後に、当該の地域にあらたに生じた変化である、と考えられる。

これに対し、半狭母音の狭母音化(18)(\*o > u, \*e > i)は、奄美・沖縄諸島にわたって広範囲に観察されている。その事実だけから判断すると、狭母音化は、奄美・沖縄諸方言が分派してそれぞれ独自の発展を遂げるよりも前に(つまり北琉球祖語に近い、かなり初期の段階で)生じた、古い変化であるような印象を受ける。しかしながら、本稿で奄美南部の諸方言の内的再建を行って、その重音節の発生にかかわる相対年代を推定してみると、予想に反し、この地域に及んだ半狭母音の狭母音化(18)はもっとも新しい変化のひとつである、と捉えなければならない結果となった。この事実は、今後、狭母音化という変化の進行過程を考えていく際の重要な手がかりを提供しているものと思われるが、紙幅の都合上、その詳細な考察と議論は別稿にゆずらなければならない。

以上、本稿では、奄美南部・瀬戸内町の重音節の発生には、アクセントの変化、および狭母音化が、深くかかわっていることを論じてきた。

- 注1 芝方言の調査は、1990年3月と7月に実施された。話者は、明治45年生まれ的女性である。
- 注2 本稿を通じて、Cは子音、Vは母音、CVCは閉音節、CV:は長音節を示すこととする。
- 注3 その記述研究が刺激となり、早田(1996)の諸鈍方言の共時的分析が生まれた。また最近では白田・重野(2017)が、同じ瀬戸内町の請島の形態音韻論的交替に関する記述・分析を行っている。
- 注4 調査は1990年3月と7月に実施。話者は男性2名(明治38年、明治39年生まれ)である。
- 注5 語末の狭母音が脱落した結果、音節末におかれることになった有声阻害音は、無声化する(例: \*k'ubi > k'ub > k'up(首)、\*k'ugi > k'ug > k'uk(釘))。(以下、本稿を通じて\*は、祖形を示す記号として使用する。)これは、瀬戸内町に広く観察される傾向である。
- 注6 この現代の語形は、「水」の祖形が(\*miduではなく)\*meduであることを示している。
- 注7 注5に述べたような有声阻害音の無声化傾向は、ここにも見られる(\*gudzɔrja > gudzɔrja > guterja(鯨)、\*ʔabura > ʔabra > ʔapra(油))。ただし、この語中の音節末子音の場合の無声化は義務的ではなく、gudzɔrjaやʔabraのように、有声のまま出現することもあった。
- 注8 古仁屋方言の調査は、1990年7月、1993年3月、2012年3月と9月、2013年1月に実施された。話者は、昭和2年生まれ男性である。
- 注9 古仁屋方言の上昇型は、現在、tɪ'na:[nu > tɪ[na nu(綱が)のように、2つのH音調の山の間のL音調を消滅させ、2つの山をひとつにまとめあげるような変化の傾向を示している。
- 注10 本稿は、琉球祖語の韻律型は『類聚名義抄』の類とは異なる分裂・統合の仕方を遂げた、という服部(1932, 1979)、松森(1998, 2000, 2012)の説を支持している。以下、琉球祖語における音調型の区別を表す際には、松森(2012)にしたがって、「類別」ではなく「系列別」のほうを使用することとする。
- 注11 古仁屋方言においても、語末母音が狭母音ではない場合にはそこに閉音節は生じない(例: hana 鼻, t'ina 綱, sina 砂, jama 山, kata 肩, mado 窓, mumo 桃, kade 風, teikjara 力)。
- 注12 この例から、「涎」には(たとえば\*judariのような)その語末に狭母音を持つ祖形が推定される。
- 注13 これら下線の引かれた三語は、大和浜方言においても語末の狭母音が欠いているが、他の奄美・沖縄諸方言のデータが、「鏡」と「鼠」にはh/、「杵」にはh/が、それぞれの祖形の語末に存在していたことを示唆している。紙面の制約の都合上、木部ほか(2011)を参照して、喜界島塩道方言の例だけを以下に挙げる(ka[ga]mi 鏡, ʔa[ɬu]mu 杵, ni[du]mi 鼠)。
- 注14 語末の狭母音脱落の例外の生起がそのアクセント型と関係していることは、柴田(編)(1984: 307-9) やかりまたほか(1992)などによって、すでに指摘されている。
- 注15 古仁屋方言には、「h'o:k 箒, i'o:k 団扇, h'e'it ひとつ, h'e'u:r 一人」など、上昇型なものにもかかわらず、その語末の狭母音が脱落している1音節語がある。これらは本来(2拍語ではなく)3拍語であったために、その語末狭母音が脱落したのだろう。なお、これらが本来3拍語であったことは、大和浜方言の「ʔoogi 扇, hooiki 箒, tŋci ひとつ, cjuuri 一人」(長田ほか(編)1977, 1980)からも確認できる。同様に、上昇型アクセントにもかかわらず閉音節を持つ古仁屋方言の1音節語としてh'ju:p(帯)があった。これまでの議論から、この語の祖形も、2拍ではなく、3拍以上の長さを有していたことが推定できる。このことは、この語の同源語が、徳之島亀津方言でkjuu]bi(平山(編著)1986: 148)、与論島方言でki[kibi(菊・高橋2005: 161)、今帰仁村与那嶺方言でhicuu]bi(仲宗根1983: 439)のような語形で出現していることから確認できる。

- 注 16 これらに対応する大和浜方言の同源語も、すべて狭母音で終わっている (xabi 紙, kubi 首, ʔibi 海老(イセエビの意), habu ハブ, mizi 水, kizi 傷, naci 夏, kugi 釘, xaki 垣根, siʔi 鋤, kuci 口, ʔuzi 妻, xusi 腰, ʔusi 牛, dusi 友達, musu 虫, hasi 橋, hwiru 大蒜, hiru 星, ʔuri 鳥, muri 盛, ʔuri(目の粗い)篩, siʔi 隅; 長田ほか(編) 1977, 1980 を参照)。これは、各語の語末に狭母音を再建できることを示唆している。
- 注 17 ちなみに語末の狭母音の脱落が生じていない大和浜方言では、「隅」と「炭」には両者とも siʔi (長田ほか(編) 1977, 1980 による) のように、同じ音節構造の語形が出現する。
- 注 18 大和浜方言では、語末の狭母音脱落(3)は生じていないため、「昼」と「夜」は、それぞれ hiru, ʔuru (長田ほか(編) 1977, 1980 による) のように、狭母音 /u/ で終わる語形を持つ。
- 注 19 その語末の上昇調、およびそれに伴って生じる長音節は、古仁屋と同じ瀬戸内町に属す加計呂麻島の諸方言に現代も残されている。次は諸鈍方言の例だが、ここでは本来の 2 拍名詞の下降型と上昇型が次のような音調型を持つ。[下降型] ʔk'u:p 首, ʔk'i:t 傷, ʔk'u:k 釘, ʔk'u:tc 口, ʔku:c 腰, ʔna:t 夏, ʔʔu:c 牛, ʔʔi:c 石, ʔdu:c 友, ʔmu:c 虫, ʔtu:r 鳥, ʔci:r 昼 [上昇型] ʔi:k'i: 息, ʔi:ki: 月, mu:gi: 麦, wu:gi: 砂糖黍, ha:gi: 足, ʔu:s'i: 臼, ma:eu: 塩, si:mi: 炭, ʔa:mi: 網, na:mi: 波, ʔu:mi: 海, ʔi:ri: 錐, ei:ru: 汁。上昇型の語末音節は長母音を持ち、そこに明瞭な LH の曲線音調が実現していることが分かる。
- 注 20 本稿では、上昇型の祖形に (\*ju[naha(夜中)のように)、高い音調で終わる型を想定しているが、これは \*ju[naha] のようにその語末を下降させて終わる型を持っていた可能性もある。その祖形の妥当性については、(瀬戸内町以外の奄美大島の諸方言のデータをも参照しながら)さらなる検討が必要である。
- 注 21 注 19 に述べたように、この語末音節は、諸鈍や芝を始めとした加計呂麻島の諸方言では (hana: のように) 長母音で出現している。しかしそれを短母音化する傾向が、古仁屋を中心とした瀬戸内町の一部地域に見られる。それがなぜなのか、という点についての議論は、別稿にゆずりたい。
- 注 22 本来の 2 拍名詞の下降型の語末に存在した HL の曲線音調は、この時点で消滅することはなかったものと思われる。しかしながら、(たとえば \*si[m] のように) 語末にある子音が、単独で HL の曲線音調を担うという音形は、典型的に見て自然なのか、疑問である。したがって、この段階で、この語形は si[m] のような形にすでに変化していた、と想定する。
- 注 23 古仁屋方言では、「白髪」と「畳」はそれぞれ ci:ja:gi, tatami のような語形で出現し、その語末の狭母音は脱落を免れている。したがってそれらの祖形の語末には (たとえば \*sirag, \*tatam のように) 狭母音ではない形を想定しなければならない。これに対し「箱」という語は ʔak, 「女」は wuna:k のような音形で出現し、それぞれ語末狭母音の脱落を遂げている。つまりそれらの祖形には (×ʔako ではなく) \*ʔaku, (×wonago ではなく) \*wonagu を、それぞれ想定しなければならないことになる。
- 注 24 その結果、古仁屋方言では、たとえば wara:p(蕨)の語末には陰音節が生じるのに対して、warabi(子供)には生じない。一方、語末の狭母音脱落が生じていない大和浜方言においては、両者は ʔwarabi(蕨)対 ʔwarabi(子供)のように、語末の狭母音の質の違いによって区別されている。

### 参考文献

長田須磨・須山名保子(編)(1977)『奄美方言分類辞典 上巻』笠間書院。

- 長田須磨・須山名保子・藤井美佐子（編）（1980）『奄美方言分類辞典 下巻』笠間書院。
- 狩俣繁久（1995）「鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍方言のフォネーム（上）」『日本東洋文化論集』1: 1-23. 琉球大学法文学部。
- かりまたしげひさ（1996）「鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍方言のフォネーム（下）」『日本東洋文化論集』2: 1-57. 琉球大学法文学部。
- かりまたしげひさ・富高康一・長嶺明子・金庸瑠（1992）「鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍方言における単語のリズム＝アクセント的構造について」『琉球列島における音声の収集と研究 I』文部省重点領域研究『日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究』琉球列島班研究成果報告書 pp.49-90.
- 菊千代・高橋俊三（2005）『与論方言辞典』武蔵野書院。
- 木部暢子・窪園晴夫・下地賀代子・ローレンス ウェイン・松森晶子（2011）『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究—喜界島方言調査報告書』国立国語研究所。
- 柴田武（編）（1984）『奄美大島のことば—分布から歴史へ—』秋山書店。
- 白田理人・重野裕美（2017）「北琉球奄美諸島阿室方言の音韻スケッチ—形態音韻論的交替を中心に—」『琉球の方言』41: 165-204.
- 仲宗根政善（1983）『沖縄今帰仁方言辞典』角川書店。
- 服部四郎（1932）『「琉球語」と『国語』との音韻法則』『方言』2-7, 8, 10, 12. 服部（1959: 296-361）に収録。
- 服部四郎（1959）『日本語の系統』岩波書店。
- 服部四郎（1979）「日本祖語について・22（最終回）」『月刊言語』8-12.
- 早田輝洋（1996）「諸鈍方言の音節構造とアクセント」『琉球の方言』20: 1-25.
- 平山輝男（編著）（1986）『奄美方言基礎語彙の研究』角川書店。
- 松森晶子（1998）「琉球アクセントの歴史的形成過程—類別語彙2拍語の特異な合流の仕方を手がかりに—」『言語研究』114: 85-114. 日本言語学会。
- 松森晶子（2000）「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発—沖永良部島の調査から—」『音声研究』4-1: 61-71. 日本音声学会。
- 松森晶子（2012）「琉球調査用『系列別語彙』の素案」『音声研究』16-1: 30-40. 日本音声学会。
- Martin, Samuel E. (1970) Shodon: A dialect of the Northern Ryukyus. *Journal of the American Oriental Society*. 90 (1): 97-139.

**謝辞** 本稿は、2018年3月5～6日に早稲田大学で開催された第13回音韻論フェスタにおいて、「奄美大島南部・瀬戸内町の音節構造」という題目で成された筆者の口頭発表の内容に基づいている。なお本稿は、科研費補助金基盤研究C（課題番号18K00588）、および国立国語研究所の共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」の研究成果の一部である。

—日本女子大学教授—

（2018年6月23日 第1稿受理）

（2018年12月25日 最終稿受理）

Historical Process of the Emergence of Heavy Syllables  
in Setouchi-chō in Amami-ōshima:  
Focusing on the Relative Chronology Regarding  
the Change of Vowel Raising

MATSUMORI Akiko

Keywords: Ryukyuan, historical linguistics, heavy syllables, accent, vowel raising

Focusing on the dialects in Setouchi-chō in Amami-ōshima, which constitute one of the subgroups of Ryukyuan, this paper presents a diachronic analysis of the occurrences of different types of heavy syllables. These are represented by word-final closed syllables in *k'u:p* (neck) and *ʔusa:k* (rabbit), the word-internal long syllables in *kutu:ba* (word) and *wara:bi* (child), or word-internal closed syllables in *ʔuk'ru* (paper bag) and *ʔapra* (oil), in the Shodon dialect of Kakeroma-jima in Setouchi-chō.

To explain how and why such different types of heavy syllables were generated in this area, this paper proposes that a relative chronology between accentual changes, which were supposed to have occurred in this area, and various phonological changes that motivated the appearance of the heavy syllables, must be taken into consideration. The paper also contends that the vowel raising of mid to high vowels (\*o > u, \*e > i) must have taken place *after* the phonological changes that motivated the emergence of those heavy syllables.